

「50歳プラス」を生きる

通り。高級ブランド店が軒を連ねる一角のレストランで、一、二ヶ月に一度、ワイン会「サロン・ド・ヴァン」が開かれる。「ヴァン」とはフランス語でワインのこと。同会を主宰する金子三郎さんが選んだワインを味わいながら、好きなワインについて自由に語り合う「大人の隠れ家」(金子さん)だ。

金子さんは六年前まで三菱電機に勤めるサラリーマンだった。会社を退職し、フランスのボルドーに留学したほどのワイン好き。ワインとの出会いは、四十年ほど前に飲んだボルドーワイン。「異国のワインに今までにならない色と香り、味そして文化を感じ、ワインにひかれた」。営業で忙しい毎日の中、プライベートではワインを探し求めた。

関西地方に勤務していた時、給料が出ると京都のワイン専門店に出かけ、ワインを飲み比べた。東京でオーバーコーションがあると聞けば、休みを取り駆けつけた。妻からは「ワイン代で家が一軒建つた」と冷やかされる。

五十歳を過ぎたころから、違った生き方ができないうかと考え始めた。父親が六十二歳で亡くなつたこと

「サロン・ド・ヴァン」を主宰する

金子 三郎さん (64歳)

東京・銀座の並木通り。

店が軒を連ねる一角のレストランで、一、二ヶ月に一度、ワイン会「サロン・ド・ヴァン」が開かれる。

「ヴァン」とはフランス語でワインのこと。同会を主宰する金子三郎さんが選んだワインを味わいながら、好きなワインについて自由に語り合う「大人の隠れ家」(金子さん)だ。



「ワインの魅力を話す金子三郎さん=東京・銀座で

本場でワイン会

といわれるボルドー第二大醸造学部に留学した。大学ではワインの知識だけでなく、フランス各地のブドウ畑を訪ねたりした。

二年間の留学を終えて学んだ。講義の内容は難しく、予習・復習の毎日。それでも「留学はワインを楽しむため」と休日はフランス文化全般について学んだ。講義の内容は難しく、予習・復習の毎日。

帰国。そんな時、銀座でレストランを経営している友人から「留学経験を生かして何かやつてみない」と提案を受けた。友人たちに声をかけ、〇五年一月、ワイン会を始めた。

毎回「十五人前後が参加し、友人が知り合いで誘い、新しい参加者も増えつつある。

「ワインを通じてすてきな人と出会い、喜んでもらえるのがうれしい」「夢を抱き続けていれば必ず実現する」と年を重ねても夢見ることの大切さを語る。(砂上麻子)

も影響していた。「残された時間は意外と少ないのではないか、ならば自分のために生きてみたい」。長年親しあったワインの集大成としてフランスへの留学を決心した。

不安がないわけではなかった。留学費用やその後の生活資金はどうするのか。手持ちの資金を計算すると七十五歳まで戻ってしまうことが分かった。妻は

「なんとかなるんじやないか」と考へ始めた。父親が六十二歳で亡くなつたこと

私の趣味

「ワインとともに趣味は古書。東京・神田の古書店街にかつてはよく通り、洋書専門店で十九世紀のワインに関する古書を見つけた。

二十世紀初頭のアール・デコのポショワール(手彩色版画)にも魅力を感じ、パリの古書店街に探しに行つたこともある。作曲家エリック・サティの楽譜とシャルル・マルタンのポショワールの合作「スポーツと気晴らし」はお気に入りだ。

「ワインのように古くても歴史と文化を感じるものにひかれるようです」